

環境問題への対処が世界的な課題となっている。環境問題は、産業革命に端を発し、資本主義経済の発達に伴い深刻さを増してきた。更には、「グローバル化」が国家間及び企業間の競争を激しくし、資源の濫費や環境の汚染を加速させている。

さて、この深刻化する環境問題に対し、各方面において根本的な解決が目指され、理論的・実的な取り組みが行われている。理論的な取り組みとしては、このような事態を招いた近代自然科学や思想の問い直しが必要とされ、実際的な取り組みとしては、これまで試みられてきた様々な社会変革についての批判的検討が必要とされている。つまり、尾関周二氏が指摘するように、学際的かつ総合的なアプローチによる「環境論的転回」が必要とされているものと思われる。このような、理論的課題のひとつに主客分離に基づく二元論的アプローチの克服が挙げられる。日本においても、洋学の導入に伴って二元論的思考に支配される結果に至っている。それに対し、西田哲学などによる思想的な模索がなされたことは周知の通りであ

環境問題の解決に向けて

福井朗子

るが、欧米諸国においてもそれを克服しようとする動きが見られる。例えば、M・ポラニーは、「暗黙知」やそれに関わる「棲み込み」という概念を用いて、客観主義によって細分化された知識は、他のものとの繋がりを希薄にするだけではなく、我々の生活ともかけ離れた事態を招く危険があると指摘している。

そもそも環境問題は、人々の生活基盤の破壊という形で顕在化してきた。自然の重要性の認識やそれを護る思想も、そのような生活基盤の破壊に対する人々の抵抗の中で獲得され形成されてきたものである。したがって、人々の生活と切り離れた研究は、環境問題がいくらマクロ的な性格を帯びるに至ったとしても適切であるとは言い難い。理論の問い直しと様々な実際的な取り組みについての検討は、この両者が本来緊密な関連を持つものであることに十分留意しながら、個々の具体的な事例に即した丹念なフィールドワークも試みる姿勢が必要ではないだろうか。

(ふくい あきこ／東洋哲学研究所研究員)